

メーワルト氏について

大川 健嗣

ウルリヒ・メーワルト (Ulrich Möhwald) 氏は、西ベルリンにあ

るベルリン自由大学東アジア研究所の助手で、一九八七年九月一日から一年間、東京大学社会科学研究所に日本研究のために留学している若手研究者です。私がメーワルト氏は最初に会ったのは、三年前に西ベルリンで開催された『21 Century is Asian Century?』という国際シンポジウムに参加したことがあります。彼は現在、S-J. パルク (Park) 教授のもとで日本研究を進めているわけです。が、今回がはじめての訪日です。私は一九八六年一〇月から文部省在学研究員としてオックスフォード大学セント・アンドニー・カトリックジに行つておりましたが、一九八七年六月下旬から一ヶ月あまりベルリン自由大学にもお世話になりました。そのとき、再会したメーワルト氏から九月に日本に行くところを聞きました。

そこで、私は、彼の研究分野が彼自身の紹介文からもわかるように農村社会学および家族社会学であることから、日本に行つたら、ぜひ秋の村研大会に出席するよう勧めたところ、「それでは」ということになり、参加という運びになりました。彼が日本において学びたいことは彼の文章にあるとおりです。今後とも村研会員の皆さまにはいろいろ御世話を頂けるようお願いします、村研大会のあと、一〇月六日夜にもう一泊した彼は、「こういの村庄内」に残った諸先生と日本酒を汲みかわしながらの日本の家族社会についての討論は実に有意義であったと喜んでおりました。一〇月七日、彼は私の案内で、山形県東田川郡藤島町長沢の専業農家S家と私の調査対象集落である同郡余目町大和地区の専業農家K家などを訪れ、秋の庄内農村の人情や風景を満喫し、夕方帰京いたしました。

なお、前掲メーワルト氏の文章は原文のままです。